

大地の芸術祭のシンポジウム 8・9 松之山分校

「アートってこんな『使い方』もあるんだ!を考えよう」に参加して

職場が夏休み入り、にわかになできた暇な時間を持って余していた矢先に、永世会長高橋秀夫さん（松高関東同窓会会長）からのお誘いがあり、母校十日町高校松之山分校（後は松高と呼ぶ）のシンポジウムにお供させていただきました。

松代駅を降りて昼食を食べようと農舞台に一步足を踏み入れた途端、イモ洗い状態の人々の群れに遭遇し、一気に大地の芸術祭の熱気に包まれました。過去3回このイベントに関わらせていただいた経験が、昨日のように懐かしくよみがえってきました。



シンポジウムは「アートってこんな『使い方』もあるんだ!を考えよう」というテーマでコーディネーターは青山学院大学 荻宿俊文教授、パネラーに大東文化大学 上野正道氏、国立教育政策研究所岡田京子氏、大地の芸術祭総合ディレクター北川フラム氏と蒼々たるメンバーでした。

学校という職場に身を置く私には身近なテーマで、芸術は個人的感性にゆだねるといった常識から一步踏み出しアートを通して教育の可能性を様々な視点から探り、共同で作りに上げるという表現活動



を通して省察し資質・能力の向上を目指すといった、人間教育をアートで実践するといった試みがこの会の主旨のようです。

すでにこの試みは松高で2011年「Artによる学び」体験講座を実施し、2015年にはプロジェクトの実践校として取り組んでいるとのことでした。2016年以降さらに実践を本格化させていく計画があるようです。



その一環として香港の宝鏡中学校生徒20名との「排他と同化の抑止をデザインした異文化交流授業」も実践しているそうです。その実践活動中の生徒の生き生きとした笑顔溢れる写真を拝見し、さ



らに今回のシンポジウムで岡田京子氏のお話の中にも具体的な実践の結果、生徒の85%は良かったと言っている例などがあげられており、Artにより楽しみながら基本的な教育を学ぶ試みは、教育にとっても適していると思いました。

教育の現場で、アートを主題にした実践報告は、ありそうで実は稀有な試みかもしれません。今後の松高の教育が楽しみです

シンポジウムの後、香港の宝覺中学校生徒20名が7月中旬から20日間松代に滞在し農業体験をしたそうで、その報告会が行われました。香港での準備段階からこちらでの農業体験まで映像を使っただけの報告でした。最後にお礼の意味も兼ね全員での、創作舞踊が披露され、アートを体で表現したような息の合った表現活動に感動しました。

シンポジウムも報告会も力の入った内容で北川フラム氏のこれらのイベントに注がれた情熱は並々ならぬ思いがあったのではと想像され、出席者の少なかったのが残念でした。



芸術祭が始まってイベントが続き、しかも猛暑の中で、「アートと教育」というテーマも松之山の住民には興味が湧かない内容かもしれないけれど、母校の教育を託していると思うともう少し関心を持って欲しいと憂慮してしまいました。

北川フラム氏は第一回の芸術祭から少しもブレていないと改めて感動しました。



話は変わりますが、永世会長さんとの旅先での話題で「かなり昔、一度だけ松高同窓会に出席したことがあります」と言うと、「その松高同窓会が松之山会の始まりだよ」とおっしゃられてびっくりしました。松高同窓生はそのことを誰も知らないかもしれませんね。

永世会長さんの一言で松之山分校同窓会関東支部の事務を引き受けてしまった東川の初めてのお願いです。

松高同窓生の皆さま、そんな訳で松高の行く末と松之山会をよろしく願います。
(東川久美子・藤倉出身)

